

「米五郎左」

若狭の戦国に 幕を下ろす

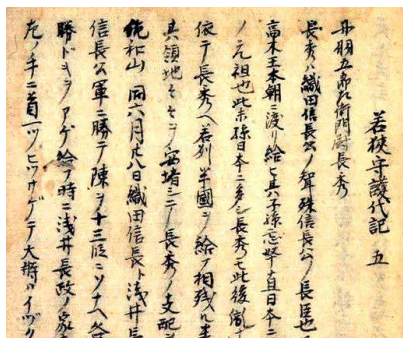


丹羽長秀肖像（模写）
（東京大学史料編纂所蔵）

丹羽長秀は尾張（現在の愛知県西部）出身の戦国武将です。同じく尾張出身の武将・織田信長に比べ、各地を転戦して回りました。後に「米五郎左」と呼ばれていたとも伝わっています。これは、米が生活に欠かせないのと同じように、織田家には長秀（＝五郎左衛門）が欠かせないという例えで、長秀が重臣としてなくてはならない存在であったことを表したものとされています。

さて、長秀というと近江佐和山城（現在の滋賀県彦根市）や越前北庄城の城主という印象が強いです

が、若狭とも深い関係があります。それどころか、若狭国守護武田氏が衰退した後の若狭を引き継いで紛争を裁定するなど、若狭の戦国時代を



長秀の事績を伝える『若狭守護代記』
（福井県文書館所蔵）

終わらせた人物ともいえます。

長秀が若狭と関係を持ち始めたのは、永禄12（1569）年のことです。当時、若狭国守護であった武田元明は、朝倉氏に従って越前へと移りました。この時、残った武田氏の家臣達に一致団結するように促した文書が小浜市内に残されています。一時は信長方と朝倉方に分裂していた家臣達も、最終的には信長方に味方することとなりました。

天正元（1573）年、朝倉氏の滅亡後、長秀は信長から若狭の支配を任せられ、武田氏や逸見氏、粟屋氏といった「若狭衆」を軍事的に指揮します。とはいえ、当時はまだ武田氏の旧臣たちが独自の所領を持っており、長秀は遠敷郡を中心にしてその権限を發揮していたようです。こうした旧臣をまとめる役割を期待されていたのかもしれませんが。

天正10（1582）年に信長が本能寺で討たれると、長秀は羽柴（豊臣）秀吉側に立って山崎の合戦に参加します。その後の清州会議では若狭一国と近江国滋賀郡・高島郡を領することになり、長秀は坂本城（現在の滋賀県大津市）へと拠点を移します。さらに翌年の賤ヶ岳の戦いで功績を挙げた長秀は越前国と加賀半国も拝領し、越前・北庄に入部します。

長秀は北庄で生涯を終えます。存命中はあまり若狭に滞在しなかったようですが、最後まで領国とし続けました。戦国時代末期、武田氏の衰退や朝倉氏の侵入によって動揺していた若狭をまとめあげた長秀は、この地域において戦国時代と江戸時代を「つなぐ」重要な役割を果たしたともいえるでしょう。まさに「米」のような、なくてはならない存在だったのです。

関連史料・ゆかりの地

若狭各地に残された古文書



長秀も署名した永禄12（1569）年、丹羽長秀や長秀を含む信長奉行によって作成された古文書が若狭地域に残されています。内容は、禁止事項を定めた禁制や領地を保障する安堵状が中心で、若狭において長秀が権利を保障できる存在であったことがわかります。

長秀も署名した永禄12（1569）年
発給の奉行人連署奉書
（神明神社文書）